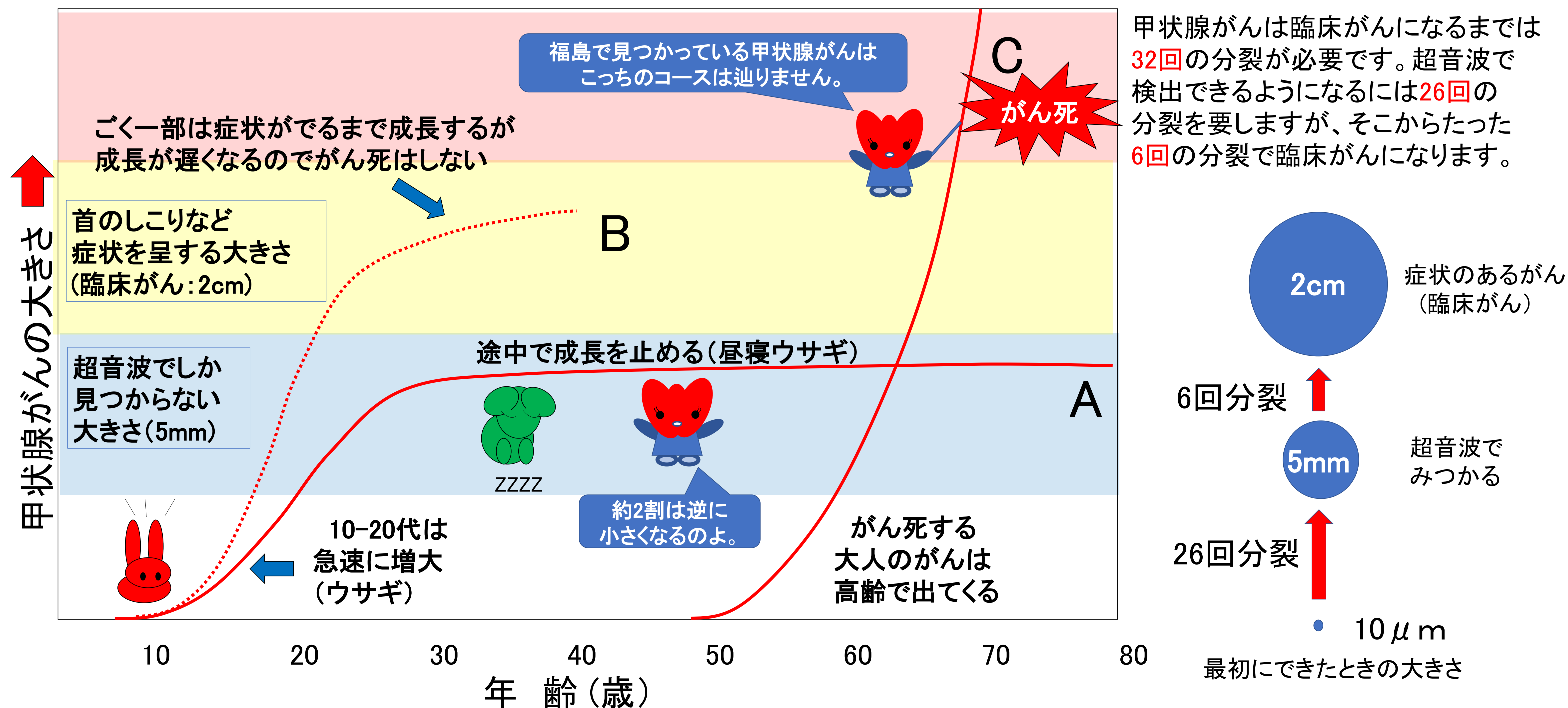


若年者の甲状腺がんの成長のしかた (甲状腺がんの自然史)

子どもや若者の甲状腺がん(若年型甲状腺がん A, B)は
中高年で発生するもの(C)とは全く性質が違います

- ① 最初は比較的速いスピードで成長しますが、30歳以降は成長が止まる傾向があります。このような特徴的な成長をすることから、イソップ童話のウサギとカメになぞらえて「昼寝ウサギ型のがん」と呼ばれています。
- ② 転移や浸潤は高い頻度で起こりますが、転移先で成長を止めるので患者を殺すことはめったにありません。
- ③ 超音波でしか見つからない甲状腺がんの大部分は小さいままで留まり、一生悪さをしません(Aのコース)。現在福島で見つっている甲状腺がんもほとんどがそのような経過をたどると予測されます。



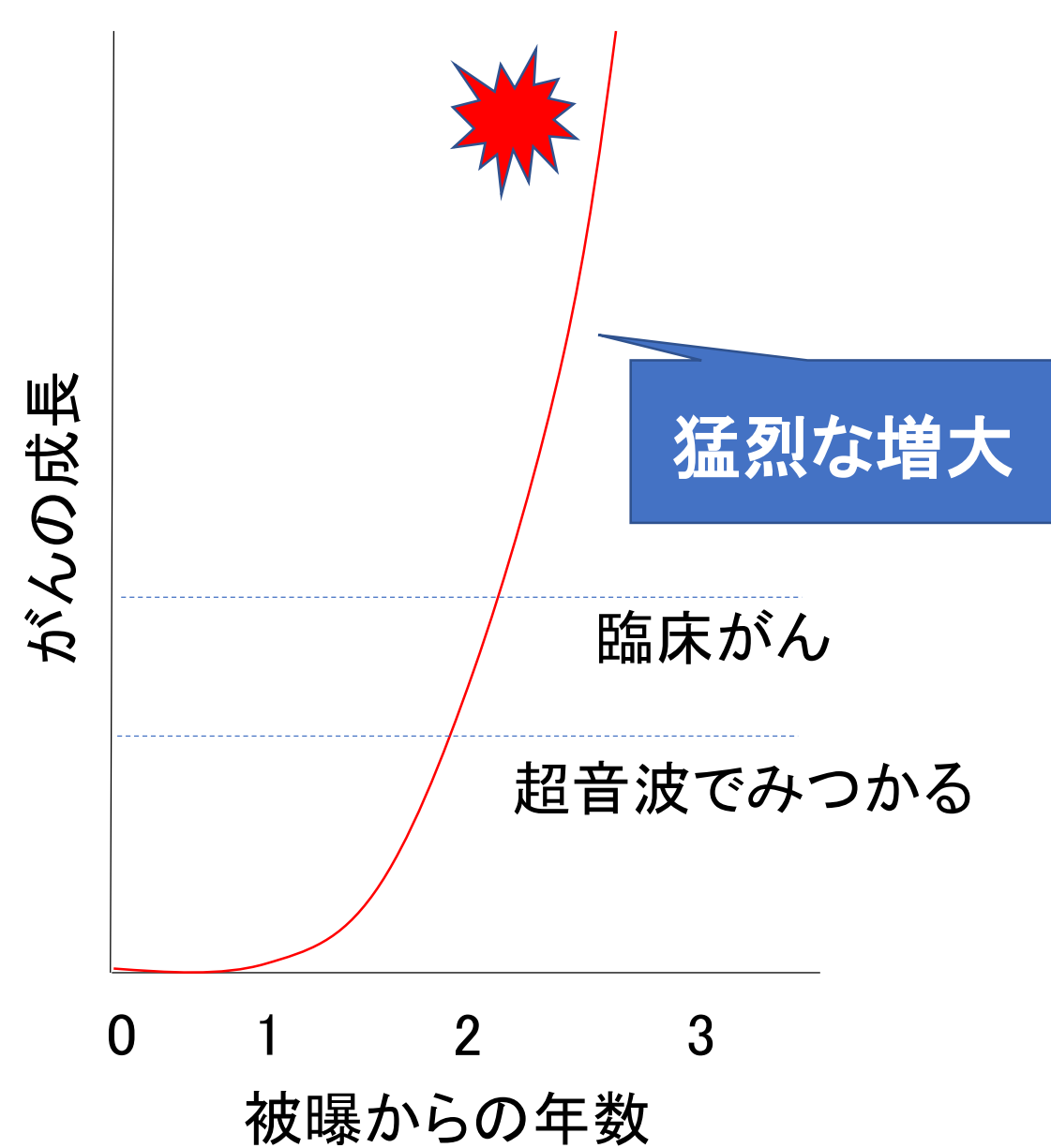
よく語られる誤った説明について

がん細胞は最初のウサギの期間(10代-20代)は右の指数関数で増えます。それを考えると福島
の甲状腺がんについてよく言われている下の解釈は間違いであることがわかります。

$$(\text{がん細胞の数}) = 2^{a/b}$$

a: 最初の発生からの時間 b: 1回の分裂に要する時間

検査一巡目(2011-2013年)
にみつかった
子どもの甲状腺がんは
被曝によるもの!

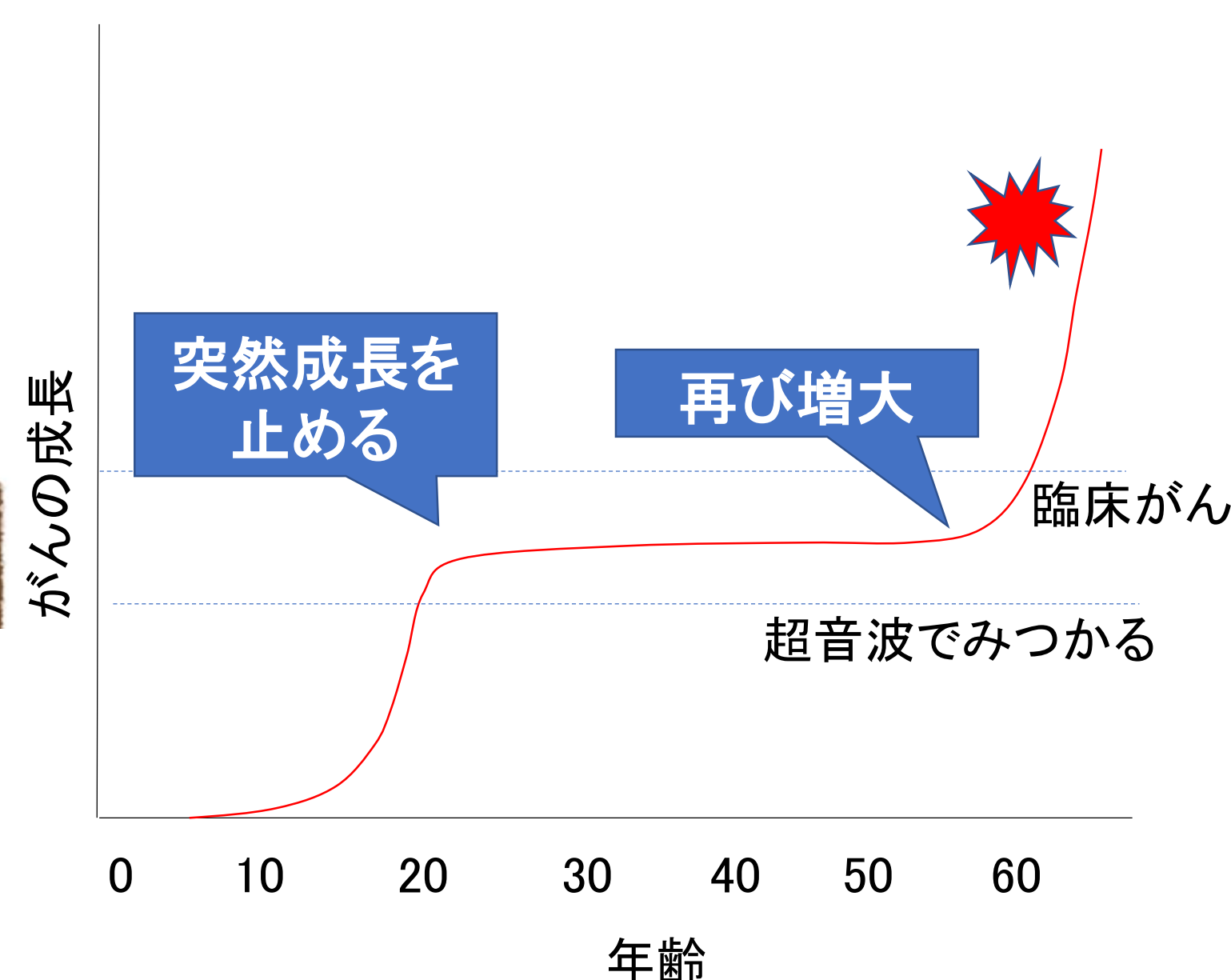


間違いです

被曝でできたがん細胞が2年で超音波で見つかるサイズまで26回分裂するのなら
1か月で倍という猛烈なペースでがんが増えることになります。そのような猛烈な
がんであれば、手術で待機している間にどんどん大きくなっていたはずですが
そのような例はありませんでした。

福島で放射線被曝の健康影響がある、と結論づけた論文はすべて1巡目の症例を
解析に入れてしまっています。UNSCEAR(国連)がそれらを評価に値しない、と
している根拠の一つがこれです。

福島甲状腺検査で見つって
いる子どもの甲状腺がんは
すべて数十年後に発生する
治療が必要な大人のがんを
超早期に見つけたもの!

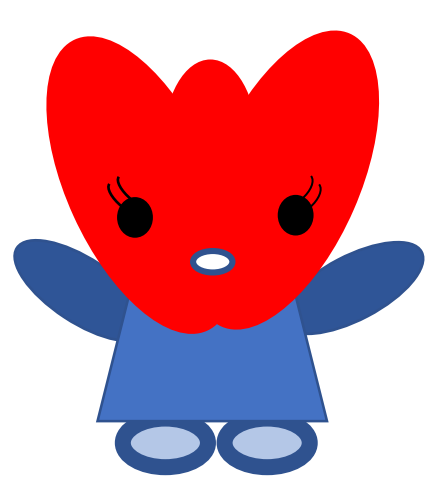


間違いです

超音波で見つかるサイズになっているので過去に平均で半年に1回程度
分裂していたわけです。この話のようにこれが高齢になるまで2cm以下で
留まりそこから再び増大するなら、見つかった途端に10年に1回程度しか
分裂しないがんに変化し、高齢になるとなぜか再び成長スピードが増加して
治療が必要になる、という解釈になります。あまりに都合がよすぎませんか?
これはがんの診断が無駄でなかったことを強調する目的で作られた話と
思われます。しかし、実際には超音波でしかみつからない高齢者の小さな
甲状腺がんが悪性化した例は一例も報告がないのです。

福島で見つっている甲状腺がんは実際は大部分が既に成長をほぼ止めて
いるがんだと考えられます。ごく一部、その後も成長を止めずに2-3年後に
臨床がんになったはずのものも混じっていたかもしれません。

(まもるの一言)



ここに記載した情報は世界保健機構(WHO)の白書などにも掲載されている国際的なコンセンサスです。しかし、
国内では「原発事故の被害を大きく見せたい」「甲状腺検査に伴う健康被害(過剰診断)を認めたくない」等の
政治的思惑から、科学的に誤った情報を広めている専門家も存在します。福島で見つかった甲状腺がんのことを
正しく知るためには検査に利害関係のない専門家の見解を聞くことが大事です。

* 若年型甲状腺癌研究会(JCJTC)は福島甲状腺検査に利害関係を有しない国内外の専門家が参加しています。